

新型コロナウイルス感染予防対策への態度に影響する 要因としての恥意識に関する基礎的検討

中村 真*

要 約

本研究は、先行研究の知見をふまえたうえで、新型コロナウイルスの感染予防対策への態度に影響する要因としての恥意識に着目し、首都圏の四年制大学に在籍する学生を対象に調査を行って、その基礎的知見を得ることを試みた。その結果、自らの理想や目標と現実の行動が一致しないことに起因する「自分恥」、および、自分の行動が社会一般の常識や規範と一致しないときに生起する「他人恥」が新型コロナウイルスの感染予防対策への態度に肯定的な影響を与える傾向があること、そして、自分の考えや行動が身近な仲間と一致しないときに生じる「仲間恥」が感染予防対策への態度に否定的な影響を与える可能性があることを示唆する知見を得た。併せて、3つの恥意識の高低の組み合わせにより調査対象者を分類し、それぞれの群が感染予防対策への態度においてどのような傾向を示すのかを探索的に検討したところ、上述の基礎的知見を裏付ける結果を得た。これらに基づいて恥意識が新型コロナウイルス感染予防対策への態度に与える影響について3つの仮説を生成するとともに、今後の研究の課題を述べた。

キーワード：恥意識、新型コロナウイルス感染予防対策、自分恥、他人恥、仲間恥

問題・目的

恥意識は、自らの理想や目標と現実の行動が一致しないことに起因して生じる「自分恥」、自分の行動が社会規範や常識と一致しないときに生じる「他人恥」、身近な仲間と自分とのあいだで考えや行動にズレが生じたときに感じる「仲間恥」で構成される(中里・松井, 2007)。

これまでの研究によって、自分恥と他人恥は、青少年の非行許容性や社会的逸脱行為を抑制し、向社会的行動を促進する働きがあり、仲間恥は、社会的逸脱行為を促進し、向社会的行動を抑制する効果があることが示されている(中里・松井,

2007; 中村, 2010, 2011, 2012, 2018)。また、「自分恥」は大学生の就学意欲に対して促進的な影響を、「他人恥」はやや促進的な影響を、「仲間恥」は抑制的な影響を与える傾向がある(中村, 2014)。さらに、「自分恥」は大学生の課題先延ばしに対して抑制的な影響を、「他人恥」はやや抑制的な影響を、「仲間恥」は促進的な影響を与える傾向があることが示されている(中村, 2017)。

このように、恥意識は青少年の意識や態度に正負両面に渡って影響を与えており、その方向性は恥の種類によって異なる。概して、自分恥と他人恥は社会的に望ましい態度を促進し、社会的に望ましくない態度を抑制すること、一方、仲間恥は社会的に望ましい態度を抑制し、社会的に望ましくない態度を促進する傾向があると言える。その主たる原因は、自分恥が自らの理想や目標への志向を、他人恥が社会規範の遵守を、仲間恥が身近

2021年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

な友人への同調を促すという異なる心性を包含するからであると考えられる。そして、仲間恥が青少年の社会的態度を望ましくない方向に向かわせる背景には、大人社会が作り出した常識や規範への反発心が共有されていること（中村，2010）、相手と深くかかわり合うことや切磋琢磨しながら互いを高め合うような友人関係を避ける傾向があること（中村，2013；中村・松田，2014）、規範意識の低い仲間と同調する傾向があること（中村，2018）が挙げられる。

本研究では、恥意識に伴うこれらの心性が青年の新型コロナウイルスの感染予防対策においても促進・抑制の両面にわたって影響を及ぼすものと考え、その影響のあり方を検討する。新型コロナウイルスに対する感染予防対策については、感染拡大の主たる原因とされる飛沫感染や接触感染を防止するという観点から、マスク着用、手洗い、手指消毒の励行とともに、室内換気やソーシャル・ディスタンスの確保によって三密（密閉・密集・密接）を避けること等が、国や厚生労働省および地方自治体から企業・学校などを通して国民に周知されており（例えば、厚生労働省，2020）、これらの感染対策は国民一般に広く認知されていると思われる。

恥意識が青少年の意識や態度に及ぼす影響を検討した一連の研究結果を踏まえると、理想や目標への志向を促す自分恥と、社会規範の遵守を促す他人恥は感染予防対策への態度に肯定的な影響を与える一方で、身近な友人への同調を促す仲間恥は感染予防対策への態度に否定的な影響を及ぼすと予測される。

本研究の目的は、大学生を対象とする調査を行って上述の予測を検証することにより、新型コロナウイルスの感染予防対策への態度に影響する要因としての恥意識の機能に関する基礎的知見を得るとともに、それに基づく新たな仮説を生成することである。併せて、3つの恥意識の高低の組み合わせにより調査対象者がどのような群に分類されるのか、そして、それぞれの群が感染予防対策への態度においてどのような傾向を示すのかを探索的に検討する。

方 法

調査対象者・調査日時

首都圏の四年制大学に通う学生 414 名（男性 190 名，女性 221 名，性別無回答 3 名，平均年齢 19.97 歳，SD 1.45）を対象に 2021 年 7 月に調査を実施した。

調査内容

質問紙の構成は以下の通りであった。

1. フェイス・シート

所属学部・学科，学年，年齢，性別を尋ねた。

2. 恥意識尺度

中村（2013，2018）の恥意識尺度 27 項目を用いて、それぞれの場面に対する恥かしさの程度を尋ねた。下位尺度は、「自分が正しいと思ったことができなかつたとき」など 9 項目から成る「自分恥」，“お祝いや式典で自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき”など 10 項目で構成される「他人恥」，“親しい仲間の意見と自分の考えが一致しなかつたとき”など 8 項目から成る「仲間恥」であった。各項目について、調査対象者自身にあてはまる程度を「全く恥ずかしくない (1)」「恥ずかしくない (2)」「あまり恥ずかしくない (3)」「すこし恥ずかしい (4)」「恥ずかしい (5)」「とても恥ずかしい (6)」の中から 1 つ選択してもらい 6 件法で回答を求めた。集計・分析にあたっては、各選択肢の () 内の数値をそれが選択された場合の得点として用いた。

3. 新型コロナウイルス感染予防に対する態度

新型コロナウイルスに対する基本的な感染予防対策として、①外出時のマスク着用，②仲間との会話時のマスク着用，③店舗等への入店時の手指消毒，④帰宅時の手洗い，⑤親しい仲間とのソーシャル・ディスタンスの確保，⑥自宅や自室の定期的な換気，の 6 項目を設定し、それぞれの感染予防対策について、調査対象者自身にあてはまると思う程度を「まったく心掛けていない (1)」「心掛けていない (2)」「あまり心掛けていない (3)」「やや心掛けていない (4)」「心掛けていない (3)」「やや心掛けていない (4)」「心掛けていない (3)」「やや心掛けていない (4)」「心掛けていない (3)」

(5)「常に心掛けている(6)」の中から1つ選択してもらって6件法で尋ねた。集計・分析にあたっては、各選択肢の()内の数値をそれが選択された場合の得点として用いた。

調査手続き

回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報 は開示されないことを説明し、同意を得たうえでオンライン講義時間中にGoogle formによるウェブ調査を実施した。

結果

1. 各変数の基本統計と性差の分析

基本統計を算出するにあたり、まず、恥意識尺度の信頼性分析を行った。 α 係数は「自分恥」が.80、「他人恥」が.83、そして「仲間恥」が.87であった。いずれも高い値を示したので一次元性があるとみなし、以降の分析に用いた。

次に、恥意識および新型コロナウイルスに対する基本的感染予防対策への態度について、各変数の平均値と標準偏差を調査対象者全体および男女別に算出し、表1に示した。恥意識の平均値は、

他人恥、自分恥、仲間恥の順に高かった。性別を独立変数とする対応のない t 検定を行った結果、「自分恥」($t(409) = -.77, n.s.$)および「仲間恥」($t(409) = -1.13, n.s.$)に性差は見られなかったが、「他人恥」($t(409) = -5.81, p < .001$)に有意差があり、男子学生よりも女子学生のほうが高いことが示された。

また、基本的感染予防対策への態度については、「外出時のマスク着用」の平均値が5.91となっており、天井効果が見られた(評定値の最高点は6点)。また、「帰宅時の手洗い」「店舗等入店時の手指消毒」においても平均値が5点を超えていた。これらに比べると、「自宅の定期的な換気」「親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス」の平均値は相対的に低かった。性別を独立変数とする対応のない t 検定を行った結果、「外出時のマスク着用」($t(219.23) = -3.15, p < .01$)、「仲間との会話時のマスク着用」($t(340.30) = -3.27, p < .01$)、「帰宅時の手洗い」($t(342.98) = -2.08, p < .05$)、「親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス」($t(379.39) = -2.59, p < .05$)に有意差があり、いずれも男子学生よりも女子学生のほうが高いことが示された。「店舗等入店時の手指消毒」(t

表1 各変数の基本統計および性差

変数	平均 (標準偏差)			t 値
	全体	男性	女性	
【恥意識】				
自分恥	3.84 (.84)	3.81 (.86)	3.87 (.82)	-.77
他人恥	4.69 (.81)	4.45 (.84)	4.90 (.73)	-5.81***
仲間恥	2.76 (.93)	2.71 (.98)	2.81 (.89)	-1.13
【基本的感染対策】				
マスク着用 (外出時)	5.91 (.42)	5.83 (.58)	5.97 (.18)	-3.15**
マスク着用 (仲間との会話時)	4.96 (1.25)	4.73 (1.43)	5.14 (1.04)	-3.27**
手指消毒 (店舗等入店時)	5.29 (.96)	5.24 (1.04)	5.33 (.89)	-.98
手洗い (帰宅時)	5.59 (.95)	5.48 (1.09)	5.68 (.80)	-2.08*
親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス	3.43 (1.61)	3.21 (1.71)	3.62 (1.51)	-2.59*
自宅の定期的な換気	4.42 (1.58)	4.34 (1.63)	4.50 (1.52)	-1.03

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(409) = -.981, *n.s.*) 「自宅の定期的な換気」(*t* (409) = -1.03, *n.s.*) に性差は見られなかった。

2. 変数間の相関分析

恥意識と基本的感染予防対策への態度について変数間の相関分析を行った。その結果、「自分恥」および「他人恥」と「仲間との会話時のマスク着用」「店舗等入店時の手指消毒」「帰宅時の手洗い」「親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス」「自宅の定期的な換気」のあいだに有意な正の相関が示された。また、「外出時のマスク着用」と「仲間恥」とのあいだに有意な負の相関が見られた(表2)。

3. 恥意識が基本的感染予防対策に与える影響(重回帰分析)

恥意識が新型コロナウイルスに対する基本的感染予防対策への態度に与える影響を検討するために、恥意識を説明変数とし、基本的感染予防対策への態度を基準変数とする強制投入法による重回帰分析を6つの感染予防対策ごとに行った(表

3)。「外出時のマスク着用」を基準変数とする分析($F(3,410) = 3.52, p < .05$)では、「他人恥」の正の標準偏回帰係数($\beta = .115, p < .05$)および「仲間恥」の負の標準偏回帰係数($\beta = -.147, p < .01$)が有意であった。

「仲間との会話時のマスク着用」($F(3,410) = 22.83, p < .001$)に対しては、「他人恥」の正の標準偏回帰係数($\beta = .354, p < .001$)が有意であった。また、「自分恥」の正の標準偏回帰係数($\beta = .091, p < .10$)および「仲間恥」の負の標準偏回帰係数($\beta = -.088, p < .10$)が有意傾向であった。

「店舗等入店時の手指消毒」($F(3,410) = 9.08, p < .001$)および「帰宅時の手洗い」($F(3,410) = 9.82, p < .001$)を基準変数とする分析では、「自分恥」の正の標準偏回帰係数(店舗等入店時の手指消毒： $\beta = .206, p < .001$, 帰宅時の手洗い： $\beta = .203, p < .001$)および「仲間恥」の負の標準偏回帰係数(店舗等入店時の手指消毒： $\beta = -.143, p < .01$, 帰宅時の手洗い： $\beta = -.195, p < .01$)が有意であった。また、「他人恥」の正の標準偏回帰係数(店舗等入店時の手指消毒： $\beta = .106, p < .10$,

表2 恥意識と基本的感染対策の相関関係

	他人恥	仲間恥	マスク着用 (外出時)	マスク着用 (仲間との 会話時)	手指消毒 (店舗等入 店時)	帰宅時の 手洗い	親しい仲間と のソーシャル・ ディスタンス	定期的な換気 (自宅)
自分恥	.440***	.354***	-.042	.216***	.202***	.180***	.173***	.214***
他人恥		.340***	.047	.364***	.148**	.128**	.172***	.150**
仲間恥			-.122*	.065	-.034	-.087 ⁺	.092 ⁺	.068
マスク着用 (外出時)				.137**	.164**	.352***	-.029	.101*
マスク着用 (仲間との会話時)					.349***	.299***	.485***	.313***
手指消毒 (店舗等入店時)						.430***	.188***	.328***
帰宅時の手洗い							.179***	.235***
親しい仲間との ソーシャル・ディスタンス								.303***

⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表3 新型コロナウイルス感染予防対策の重回帰分析

基準変数	恥意識(説明変数)			N	F	R ²
	自分恥	他人恥	仲間恥			
マスク着用(外出時)	-.041	.115*	-.147**	414	3.517*	.025
マスク着用(仲間との会話時)	.091 ⁺	.354***	-.088 ⁺	414	22.827***	.143
手指消毒(店舗等入店時)	.206***	.106 ⁺	-.143**	414	9.076***	.062
帰宅時の手洗い	.203***	.105 ⁺	-.195**	414	9.820***	.067
(親しい仲間との) ソーシャル・ディスタンス	.118*	.117*	.010	414	5.928**	.042
定期的な換気(自宅)	.190**	.075	-.024	414	7.246***	.050

⁺p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001 数値は標準偏回帰係数

帰宅時の手洗い： $\beta = .105, p < .10$) が有意傾向であった。

「親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス」($F(3,410) = 5.93, p < .01$) に対しては、「自分恥」($\beta = .118, p < .05$) と「他人恥」($\beta = .117, p < .05$) の正の標準偏回帰係数が有意であった。

「自宅の定期的な換気」($F(3,410) = 7.25, p < .001$) に対しては、「自分恥」の正の標準偏回帰係数 ($\beta = .190, p < .01$) が有意であった。

4. 恥意識に基づく大学生の分類

恥意識を構成する3つの因子について、調査対象者ごとに算出した合成得点(それぞれの因子を構成する全ての項目の素点合計を項目数で除した値)を標準化し、これら3つの標準化得点(z得点)を用いてWard法によるクラスター分析を行った。その結果、5つのクラスターを得た。第1クラスターから第5クラスターに含まれる対象者数は、それぞれ、71名、81名、122名、86名、54名であった。 χ^2 検定を行った結果、人数比率の偏りが有意であった($\chi^2(4) = 30.420, p < .001$)。

次に、得られた5つのクラスターを独立変数、恥意識を従属変数とする一元配置分散分析を3つの恥意識ごとに行った。その結果、自分恥($F(4,409) = 125.63, p < .001$)、他人恥($F(4,409) = 140.03, p < .001$)、仲間恥($F(4,409) = 186.93, p < .001$)のいずれも主効果が有意であり群間差が見られた。図1に5つのクラスターごとにみた恥意識得点(z得点)を示す。

TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、自分恥については、第1クラスターと第4クラスター、第2クラスターと第5クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった。各クラスターを平均値の高い順に並べると、第5クラスター>第2クラスター>第1クラスター>第4クラスター>第3クラスターであった。

他人恥では、第1クラスターと第5クラスター、第4クラスターと第5クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった。各クラスターを平均値の高い順に並べると、第2クラスター>第1クラスター>第5クラスター>第4クラスター>第3クラスターであった。

仲間恥では、第1クラスターと第3クラスター、第1クラスターと第5クラスター、第3クラスターと第5クラスターの組み合わせを除く全てのクラスター間の平均値の差が5%水準で有意であった。各クラスターを平均値の高い順に並べると、第2クラスター>第4クラスター>第5クラスター>第3クラスター>第1クラスターであった。

分散分析および多重比較によって得られた結果を総合的に概観して、各クラスターの特徴をまとめると以下の通りとなる。第1クラスターは、他人恥が高く、自分恥が中程度で仲間恥が低い傾向を示している。「他人恥優勢群」とした。第2クラスターは、自分恥、他人恥、仲間恥がそろっ

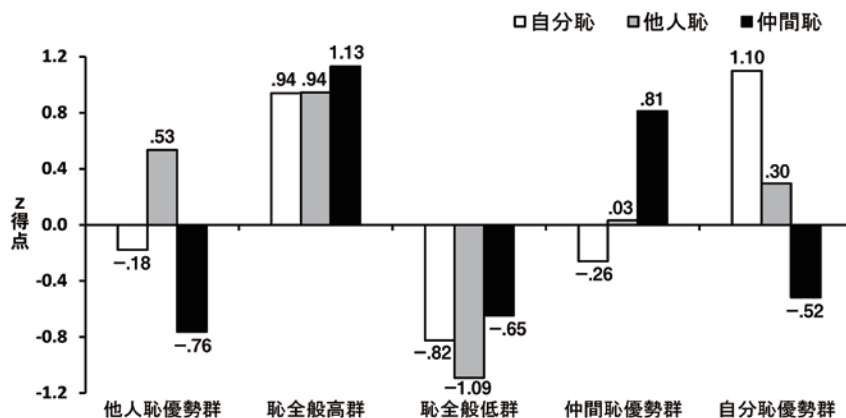


図1 各クラスターの恥意識得点 (z 得点)

て高いので「恥全般高群」とした。第3クラスターは、自分恥、他人恥、仲間恥がそろって低いので「恥全般低群」とした。第4クラスターは、仲間恥が高く、自分恥と他人恥がともに中程度であるため「仲間恥優勢群」とした。第5クラスターは、自分恥が高く、他人恥が中程度で仲間恥が低いので、「自分恥優勢群」とした。

5. 恥意識のタイプごとにみた 基本的感染予防対策への態度

恥意識に基づく5つのタイプによって、新型コロナウイルスに対する基本的感染予防対策への態度が異なるかどうかを検討するために、恥意識の高低の組み合わせに基づく5つのクラスターを独立変数とし、基本的感染予防対策への態度を従属変数とする一元配置分散分析を感染予防対策の種類ごとに行った。恥意識のタイプごとにみた基本的感染予防対策への態度の平均値を図2～図7に示す。分散分析の結果、「外出時のマスク着用」を除く5つの感染予防対策への態度において主効果が有意であった（店舗入店時の手指消毒： $F(4,409) = 4.59, p < .01$ 、仲間との会話時におけるマスク着用： $F(4,409) = 10.75, p < .001$ 、定期的な自宅の換気： $F(4,409) = 2.79, p < .05$ 、帰宅後の手洗い： $F(4,409) = 4.27, p < .01$ 、外出時のマスク着用： $F(4,409) = 1.40, n.s.$ 、親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス： $F(4,409) = 3.80, p < .01$ ）。

主効果が有意であった5つの基本的感染予防対策への態度について、TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った。「仲間との会話時のマスク着用」については、「恥全般高群」が「恥全般低群」および「仲間恥優勢群」に比べて有意に高い得点を示した。また、「他人恥優勢群」が「恥全般低群」よりも、そして、「自分恥優勢群」が「恥全般低群」よりも有意に高い得点を示した。

「店舗等入店時の手指消毒」では、「恥全般高群」が「仲間恥優勢群」に比べて有意に高い得点を示した。また、「他人恥優勢群」が「仲間恥優勢群」よりも、そして、「自分恥優勢群」が「仲間恥優勢群」よりも有意に高い得点を示した。

「帰宅時の手洗い」については、「自分恥優勢群」が「仲間恥優勢群」に比べて有意に高い得点を示した。また、「他人恥優勢群」が「仲間恥優勢群」よりも、そして、「恥全般高群」が「仲間恥優勢群」よりも有意に高い得点を示した。

「親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス」では、「恥全般高群」が「恥全般低群」に比べて有意に高い得点を示した。

「自宅の定期的な換気」については、「自分恥優勢群」が「恥全般低群」に比べて有意に高い得点を示した。

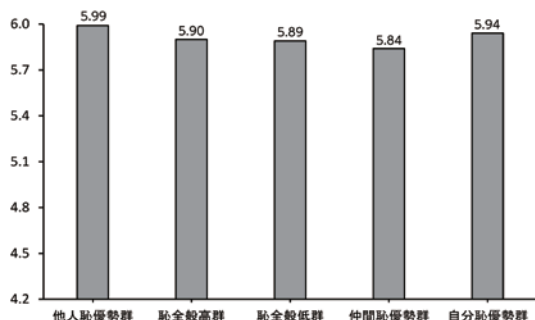


図2 恥意識のクラスターごとに見た外出時のマスク着用

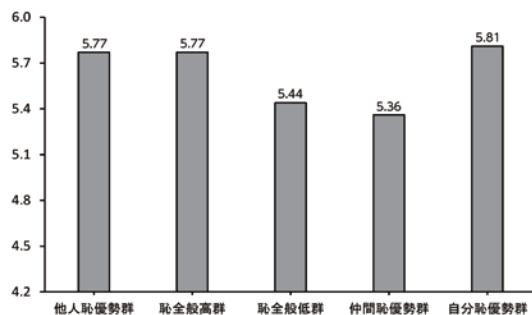


図5 恥意識のクラスターごとに見た帰宅時の手洗い

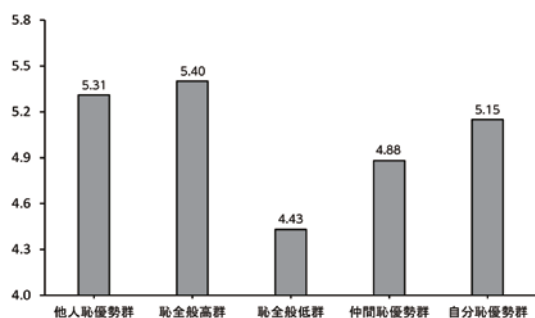


図3 恥意識のクラスターごとに見た仲間との会話時のマスク着用

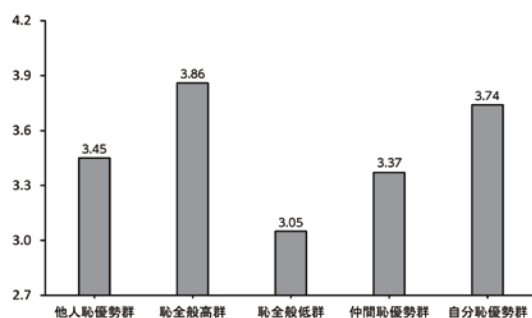


図6 恥意識のクラスターごとに見た親しい仲間とのソーシャル・ディスタンス

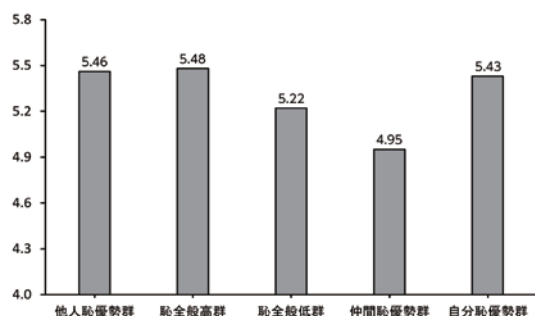


図4 恥意識のクラスターごとに見た店舗等入店時の手指消毒

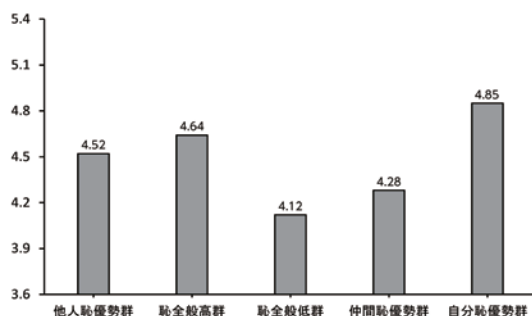


図7 恥意識のクラスターごとに見た定期的な自宅の換気

考 察

本研究では、大学生を対象とする調査を実施して、恥意識が新型コロナウイルスの感染予防対策への態度にどのような影響を与えるのかを検討し

た。基本的感染予防対策を基準変数とし、恥意識を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を6つの感染予防対策ごとに行った結果、総じて、「手指消毒」「帰宅時の手洗い」に対しては、自分恥が正の影響を、仲間恥が負の影響を与えることが示された。また、「マスク」着用に対しては、他人恥が正の影響を、仲間恥が負の影響を与える

ことが示された。そして、「ソーシャル・ディスタンスの確保」に対しては、自分恥と他人恥が正の影響を、「自宅の定期的な換気」に対しては自分恥が正の影響を与えることが示された。

これらの結果は、自らの理想や目標と深く結びついた自分恥が、手洗い、手指消毒、換気といった他者の目にはとまりにくく励行の有無が本人にしか分からない感染対策を促す傾向があることを示すものである。また、自分の行動と社会規範の不一致に起因する他人恥は、視認性が高く他者の目にとまりやすい感染対策であるマスク着用の遵守を促す傾向があることを示す。一方、身近な友人との不一致に起因する仲間恥は、「ソーシャル・ディスタンス」や「換気」には影響しないものの、視認性が高いマスク着用や、他者の目にはとまりにくい手洗い、手指消毒に負の影響を与えていることから、感染予防対策に対して抑制的に影響する可能性があると考えられる。

以上のことから、恥意識が新型コロナウイルスの基本的感染予防対策への態度に与える影響について、次のような仮説が導かれる。まず、自らの理想と現実の行動が一致しないことに起因する自分恥は、理想や目標への志向を促すので、感染予防の成否に大きく影響することが認められているものの、顕現性が低く励行の有無が本人にしか分からない手洗いや手指消毒などの感染対策を促進するという点で自律的に機能する（仮説1）。また、自分の行動が社会のルールや常識と一致しないことによって生じる他人恥は、社会規範の遵守を促すので、予防効果が世間一般に広く認められており、かつ、視認性が高く他者の目にとまりやすい感染対策であるマスク着用を促進するという点で他律的に機能する（仮説2）。一方、仲間との不一致に起因する仲間恥は、大人社会が作った常識や規範への反発心を共有しつつ互いを高め合うような友人関係を避ける、という最近の若者に特有の心性を背景に、規範意識の低い友人への同調を促すと思われるので、感染対策を抑制する可能性があると考えられる（仮説3）。ただし、仮説3で想定した仲間恥の感染予防対策に対する抑制傾向は、本研究における調査において基本的感染対策

全般に認められるものではなかったため、今後の仮説検証においては、その影響のあり方を慎重に検討する必要がある。

次に、3つの恥意識を用いたクラスター分析の結果に基づいて調査対象者を5つの群に分類し、それぞれの群が新型コロナウイルスの基本的感染予防対策への態度においてどのような傾向を示すのかを検討した。その結果、「恥全般高群」「自分恥優勢群」「他人恥優勢群」においては、基本的感染予防対策に対する態度が肯定的であった。一方、「恥全般低群」「仲間恥優勢群」では、基本的感染予防対策の態度得点が低く、否定的な傾向を示した。換言すると、自分恥と他人恥の両方またはどちらかが高ければ、仲間恥の高低にかかわらず基本的感染予防対策への態度は肯定的であるが、仲間恥が高く自分恥と他人恥が低い場合は、感染予防対策への態度が否定的になることを意味する。これらの結果は、恥意識が青少年の意識や態度に及ぼす影響について検討した一連の先行研究の知見と対応するものであり、新型コロナウイルスの感染予防対策への態度においても自分恥と他人恥が肯定的な影響を与え、仲間恥が否定的な影響を与えることを裏付けるものである。

今後の課題として、まず、新型コロナウイルスの感染予防対策への態度を把握するための測定法の問題が挙げられる。本研究では、国や厚生労働省が強く推奨する基本的感染対策である「マスク着用」「手指消毒」「手洗い」「ソーシャル・ディスタンスの確保」「換気の徹底」に焦点を絞り、それらを心掛ける程度を尋ねるという方式で態度測定を行った。しかし、一部の項目で天井効果が生じてしまい、測定法に課題を残した。加えて、感染予防対策の中には、「親しい仲間とのソーシャル・ディスタンスの確保」のように対人的相互作用を伴う対策と、「手洗い」のように対人的相互作用を伴わない対策が混在しており、前者においては回答者が想定した相互作用の対象者との関係性が感染予防対策への態度に大きく影響すると考えられるが、本研究における態度測定および分析においては、この点への考慮が十分ではなかった。また、本研究では新型コロナウイルスの感染

予防対策への態度に与える要因として恥意識に焦点を絞り、その基礎的知見を得ることを目的としたため、感染予防対策に影響する他の要因については検討しなかった。一方で、恥意識の他にも、自己の感染予防、他者への感染予防、他者への同調、不安の緩和などの諸要因が手洗い行動やマスク着用に影響することを明らかにした研究（中谷内・尾崎・柴田・横井，2021；榎原・大藪，2021）や、感染予防行動の関連要因として、防護動機理論における、リスク認知、反応効果性認知、実行可能性認知、反応コスト、および、規範焦点理論における、命令的規範、記述的規範といった認知変数の影響を明らかにした研究（樋口・荒井・伊藤・中村・甲斐，2021）も見受けられる。今後は、以上の課題をふまえて、質問項目および選択肢の再構成ならびに恥意識以外の要因の影響を検討したうえで新たな調査を行うことにより、本研究において導かれた3つの仮説を検証する必要がある。

文献

- 樋口 匡貴・荒井 弘和・伊藤 拓・中村 菜々子・甲斐 裕子 2021 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間における予防行動の関連要因：東京都在住者を対象とした検討 日本公衆衛生雑誌, 68, 597-607.
- 厚生労働省 2020 国民の皆さまへ（新型コロナウイルス感染症） Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00094.html (2020年7月7日)
- 中村 真 2010 恥意識が社会的迷惑行為および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集 114.
- 中村 真 2011 恥意識が向社会的行動および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響—仲間との不一致に起因する恥意識は向社会的行動を抑制し、社会的逸脱行為を促進するの— 日本パーソナリティ心理学会第20回大会発表論文集 116.
- 中村 真 2012 恥意識が向社会的行動および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響（2）—恥意識の種類でみた対象者のタイプと向社会的行動および社会的逸脱行為との関連— 日本社会心理学会第53回大会発表論文集 380.
- 中村 真 2013 恥意識尺度の信頼性・妥当性の検討 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集 151.
- 中村 真 2014 恥意識が大学生の就学意欲に及ぼす影響—仲間との不一致に起因する恥意識は就学意欲を抑制するの— 日本パーソナリティ心理学会第23回大会発表論文集 88.
- 中村 真・松田英子 2014 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 —帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能— 江戸川大学紀要 第24号 13-19.
- 中村 真 2017 恥意識が大学生の先延ばしに及ぼす影響—仲間との不一致に起因する恥意識は先延ばしを促進するの— 日本パーソナリティ心理学会第26回大会発表論文集 90.
- 中村 真 2018 社会的逸脱行為の促進・抑制要因としての恥意識に関する基礎的検討 江戸川大学紀要 第28号 277-283.
- 中里至正・松井 洋 2007 心のブレーキとしての恥意識—問題の多い日本の若者たち プレーン出版
- 中谷内 一也・尾崎 拓・柴田 俊秀・横井 良典 2021 新型コロナウイルス拡大期における手洗い行動の規定因 心理学研究, 92, 327-331.
- 榎原 良太・大藪 博記 2021 人々がマスクを着用する理由とは—国内研究の追試とリサーチエスションの検証— 心理学研究, 92, 332-338.

